

# 天文月報 100 巻によせて： 素人編集長の思い出



関 口 和 寛

〈国立天文台光赤外研究部 〒181-8588 東京都三鷹市大沢 2-21-1〉

e-mail: kaz.sekiguchi@nao.ac.jp

「天文月報」創刊 100 年、おめでとうございます。100 年も続く月刊誌は珍しいのではないかと考えています。今後も天文学的に長く(?) 社会一般の読者、天文学会会員、および他分野の研究者のみなさんに天文学分野での成果や情報の公開、普及を続けてくださることを期待しています。

さて本題のエッセイですが、和田編集長から「歴代編集長のエッセイ」をお願いしたいという依頼を受けた時には、原稿集めの苦労を知る元編集長としては断りきれないとみた、効果的な企画だなと妙に感心しました。そこで、創刊 100 年の 100 巻記念に相応しくない雑文になりますが、天文月報 100 年の歴史の一コマ(正確には 1995 年 4 月 1 日から 1997 年 3 月末まで、当時は任期が 4 月 1 日からの 2 年間でした)に筆者が「編集長」という大役に就いた経過と顛末を紹介いたします。

「すばる望遠鏡プロジェクト」に携わるため、筆者が国立天文台に奉職したのは 1994 年 12 月でした。日本の大学(学部)を卒業した後、米国の大学院で天文学の学位を取得した筆者は、その後、南アフリカ天文台で 8 年間研究生生活を続け、都合 13 年間の後、久しぶりの日本へ帰りました。こうした経歴をもつ筆者は、それまで日本の天文学界とはほとんど接点がありませんでした。天文台も天文学会も、それらがどのような組織で、どのような仕組みや“掟”により運営されているのか、全く知らない「浦島太郎」のような状態での帰国、

就職でした。ただ、長く天文学会の会員だったので「天文月報」の存在は知っていました。

不安を抱きながらの日本生活再スタートでしたが、そこは親切な人が集まっている天文学の世界、天文台スタッフや他の天文学関係者のみなさんの心温まる歓迎を受け「やはり日本の人は、特に天文学関係の人たちはいい人ばかりだ」と感激していました。なにしろ天文台では毎日のようにどこかの研究室で酒盛りがあり(これには少なからぬカルチャーショックを受けました。でも直ぐに順応!)、新参者はみなさんからお誘いを受けました。

まだ日本に着いて 1 カ月と経たぬある日、夜間に東大天文教育センターの田辺俊彦さんのオフィス(当時は国立天文台、三鷹キャンパスの南研にあった)を訪ねました。彼は無類の酒豪で知られていました。筆者が会いに行った用件は忘れてしまいましたが、なぜか、当時天文月報編集長だった谷川清隆さんの部屋で酒盛りになりました。初対面の谷川さんはニコニコとして快活、筆者にも親しく接してくれたので、ついお酒が進んでしまいました。その後の経過は霧の中、どうもこの場で天文月報の編集長を引き受けてしまったようです。「ようす」とはなんと曖昧な、と言われてもなにぶん自覚がなかったので、谷川さんが、「関口君は天文学会の会員だよ」と念を押していたことだけは覚えています。後になって日本天文学会から正式に「天文月報編集長」への就任受諾確認のための手紙がきて、初めてそのことに気がつい

たというのが正直なところですが。谷川さんは、1995年3月末まで編集長を務められ、筆者はその後を受け継いだことになります。

『知り合った人の優しさに対するちょっとした気の緩みから…中略…特に、その人のオフィス（原文：家）に行ったり、すすめられた酒を飲む（原文：物を食べる）ことは控えましょう\*。』

これは誰でも知っている注意事項ですね。でも、自分だけは大丈夫と思ってはいけません。谷川さんは、この教訓が海外だけでなく日本国内でも適応されることを教えてくださった親切な先輩です。

その後天文台に勤務して12年余り、今ではこの手で事情を知らない新参者の中から、いろいろな役割の担当者が集められるということが理解できるようになりました。昔英国海軍では、港のPubで飲んだくれを捕まえて船に乗せて乗員を集めた、といいますから同じようなものです。

そのようなわけで編集長になった筆者は、もちろん出版や編集については「ド素人」でした。就任当初は何も知らない者の強さで、「こんな風にしたい、あれもしたい」と勝手なことを考えましたが、とにかく毎月原稿を揃えて出版に漕ぎ着け

ることに汲々として、人の顔を見ると原稿を依頼する癖ができました。天文月報が創刊90号くらいで廃刊にならなかったのは、ひとえに他の編集委員のみなさん（末松芳法、田代 信、辻本拓司、中川貴雄、林 左絵子、平野尚美、宮坂正大の各氏）、そしてDTP担当の峯尾由紀子さん、学会事務所の月報担当の塩見道子さん、山崎利江さん、たちの努力とサポート、さらに、快く執筆を引き受けてくださったみなさんのおかげでした。

そして、筆者が編集長を勤めたちょうどこの時期には、編集作業の大幅な見直しを行い、DTP化による工程の簡素化と省力化、月報ホームページの開設などを行いました。今ではDTPはあたりまえ、ホームページも「天文月報オンライン」になっていますが、当時としては斬新な企画でどうなることかと心配したものです。これらが断行できたのも時代の要請もあったでしょうが、怖いもの知らずの素人編集長だったからかもしれません。

それやこれやで、今では楽しい思い出です。こんな経験を与えてくださった谷川さんには（ホントに）感謝しています。天文学会員の声としての天文月報も100巻の節目に当たり、今後ますます発展し、より良い記事で埋まることを期待しています。

\* 外務省刊「海外安全虎の巻」海外安全のための基礎知識 (4): 見知らぬ人を安易に信用しない、より引用。